

平成20年度秋期特別展

—「まぼろしの唐代精華—黄冶 唐三彩窯の考古新発見—」 始末記—

きっかけ 飛鳥資料館は、平成17年度、日中共同研究として奈良文化財研究所が行った唐長安城大明宮太液池の調査の成果を中心とした秋期特別展「東アジアの古代苑池」を研究パートナーである中国社会科学院考古研究所ほかと主催することができた。これを受け、当館学芸室では、おりあらば、奈文研が実施している他の海外共同研究の成果も特別展として広く公開する方針を立てた。そうした中、奈文研と河南省文物考古研究所が進めている共同研究の成果の展覧会を開けないかという話が持ち上がり、田辺征夫館長から検討するよう指示があったのがきっかけだった。

展示品 基本的な展示コンセプトが共同調査の成果の公表であり、中国の文物は中国国内で既報告のものでなければ海外展示できないという制約もあることから、『黄冶唐三彩窯の考古新発見』（奈文研史料73冊、2006）にそって展示を行ない、展示品もそこから選定することとし、巽淳一郎副所長（当時）と協議しながら選定作業を進めた。そこでは、唐三彩の優品ばかりでなく、できるだけ多様な器種や唐青花などを含む多種のもの、操業開始期から停止期にいたる各時期のもの、製品ばかりでなく、未製品や窯道具など、従来、日本では展示されてこなかった生産関連品などを選定することに努めた。そして、加藤と西田紀子が平成19年4月22日～27日におこなった資料調査を踏まえ、最終的には、河南省側からも推薦があった黄冶窯近隣の北窑湾唐墓群出土品などを加えた71件93点を展示品として決定した。

図録類の作成 平成19年12月5日～19日に牛嶋茂、平成20年5月27日～6月6日に井上直夫、岡田愛を河南省に派遣し、図録掲載写真、図録表紙とポスター用写真を撮影した。図録には展示品全点のカラー写真を提示することとしたが、カラー図版のページ数に限りがあり、個別資料の詳細写真も『黄冶唐三彩窯の考古新発見』に掲載されていることから、集合写真を巻頭のカラー図版各ページに1枚ずつ載せることとした。また、図録本文については、協議の結果、河南省文物考古研究所、降幡順子、飛鳥資料館で執筆することになり、河南省側から孫新民所長、郭木森研究館員の玉稿「鞏

義黄冶窯跡の調査と発掘」を賜った。飛鳥資料館担当部分では、ちょうど河南省文物考古研究所と中国文物研究所が報告した「河南鞏義市黄冶窯址発掘簡報」『華夏考古』2007年第4期が大変参考となり、そこから挿図なども作成した。

展覧会の実施 平成20年10月2日～8日に杉山、加藤が展示品借用に出張したのを皮切りに、展覧会の実施段階に移った。10月8日、展示品とともに河南省文物考古研究所の郭移洪、郭培育の2名が検品、展示指導のため来日し（15日帰国）、開梱と展示作業が始まった。15日には、孫新民所長以下、代表団6名が来日している（24日帰国）。そして、16日夕方、開幕式が行なわれ、翌17日から展覧会が開始された。10月18日には記念講演会を平城宮跡資料館講堂で開催した。演題と講演者と演題は、次のとおり。郭木森「鞏義市黄冶窯址に対する考古発掘と初歩的研究」、巽淳一郎「唐三彩の生産と供給」、劉蘭華（中国文化遺産研究院）「黄冶窯址出土の藍花器からみた唐代青花瓷器の発生と発展」、孫新民「鞏義黄冶窯とその他唐三彩窯の異同」。また、期間中は、後援の読売新聞大阪本社のご好意で、奈良版に展示品解説を連載したほか、朝日新聞等でも取り上げていただいた。

12月8日の閉幕後、12月14日には、検品と撤収指導に来日した河南省文物考古研究所の孫建国、王蔚波の2名とともに、杉山、加藤、井上の3名が展示品の返却に訪中し、18日に無事返却を終えた。

特別展の参観者は11,695名。19年度より2000名ほど増加した。最後に、関係者の方々に感謝いたします。

（杉山 洋・加藤真二）